
伝えたい言葉

さすらいのかえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝えたい言葉

【Nコード】

N1180B

【作者名】

さすらいのかえる

【あらすじ】

感情を殺して、周りに合わせていた女の子が、何故か素直に気持ちを出せる不思議な男の子と出会った。そして・・・

第1話…ちょっと待って

痛！ 昨日、深く切りすぎてしまった、右の足首が痛い。

皆にばれないように、朝から普通に歩いていたけど、限界がきたようだった。

今日は体育がないから良かったけど、少し歩くの止めよう。

そう思ったとたん。クラスの女の子がわたしに声をかけてきた。

「トイレ行こ」

こんな時に絶妙なタイミングだ。心の中では「一人で行け!!」と思うが、わたしは笑顔で言った。

「いいよ」

わたしは席を立ち、一緒にトイレに行く事にする。隣に並んで歩いている子とは別に仲が良いわけじゃない。

ただ、クラスで孤立しない為に愛想を良くしている。こういう時、わたしは自分が嫌いになる。

その後は、特に何もなく授業が終わった。やれやれ・・・でも動けそうにない。少し無理しすぎたのかな。

わたしは、一緒に帰ろうと誘ってくるクラスの子たちを適当な理由をつけて断り、自分の席に座って全員帰るのを待った。

よし。だいたい知り合いは帰ったな。私は慎重に立ち上がって、少

し足を引きずりながら廊下を歩く。
い、家まで遠いなこれ。はあく。

「大丈夫！？ 血が出てるよ」

声のした方を見ると、知らない小柄な男の子が立っていた。

わたしは身長が高い方だけど、それにしてもちっこい小動物系だと思っ

「平気」

「いや、足引きずってるじゃん」

「だからほっときなチビ！」

「うわ！ 凄いな」

何か感心された・・・

「保健室行こ」

あくお節介なやつに掴まってしまった。

「何回言えばわかって何すんのよ！」

男の子が私を抱えて保健室に連れて行こうとした。意外に力ある？

「実力行使？」

「・・・」

はあくもう反抗するのがめんどい。気が済むようにしよう。わたしは抵抗するのを止めた。

男の子はわたしを抱えて淡々と廊下を歩く。特に誰も会わずに保健

室についた。ほっとする。

保健室の前でわたしを降ろすと男の子が言った。

「意外と軽いねきみ。ご飯食べてる？」

「・・・」

わたしが黙っているのを気にせずに、男の子は鞆から鍵を取り出すと保健室のドアを開けた。ん？

「あゝ僕は保険委員なんだ」

わたしが不思議そうに見ているのがわかったのだろうか？

男の子は保健室に入るとテキパキと動き、治療の準備を終えた。あ、何か慣れてるな。

「きみ〴〵こっち来てよ」

わたしは、中に入らずにドアの前で立っていた。

「また抱っこする？」

・・・一瞬してほしいと思ってしまった。わたしは少し足を庇ながら歩いて、男の子の前に座る。

「足見せて」

さっきから、ず〴〵と言いなりになってる気がする。だんだん今の状況にムカついてきた。

「高いよ」

「え！あゝ高そうだ。いくら？」

「一万で触らせてあげる」

「高！ 安くなんない？」

「なんない」

あれ、話が変になってきたな・・・。

「んゝ分割でどうだ！」

本気で言ってるのか？ まあ、いいや。

「しょうがない分割もありで」

男の子は財布を出すと、五千円を出してわたしに握らせた・・・。
な、何考えてんだこいつ。ヤバイ子なのか。

「右足出して」

え・・・。ちょっと待って、どうしよう逃げようかな。

わたしが迷っていると、男の子が笑いながら言う。

「自分で言っというて怯えないでよ。手当てするだけだから。はい」

わたしは恐々足を出す。男の子は血の付いたルーズソックスを脱が
すと一瞬眉をひそめた。

そのまま治療してくれてるけど。うゝん。気付かれたな。

その時、わたしの足に消毒液とは違う冷たい感触を感じる。男の子
の瞳から流れ落ちる涙だった。

「何で泣いてんの？」

「気にするな」

「そういう事なら聞かないよ」

「ありがとう」

足を見ていた男の子の視線が、ふっと手首に移る、わたしが言う。

「手首は目立つからしない」

「そっか」

男の子がそう言ったあと、わたしを優しく抱きしめた。何だか心地よい。

「五千円の分」

「抱きしめるのは別料金じゃないと」

「え〜」

男の子とは、何も聞かず、聞かれずに別れた。

歩く分には平気になった足で家に帰る。わたしの足を見て泣いていた顔が忘れられない。なぜかとても嬉しかった。

わたしの代わりに泣いてくれたような・・・わたしが最後に泣いたのはいつだったろう？

泣く事なんて忘れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1180b/>

伝えたい言葉

2010年10月9日19時43分発行